

それはそれとして、関西へ流れてきて、どうにも閉口した食べものは？ と聞くと、升心な、日常には特に感じない、といます。だが、同時にみんなそろって「あれには参った……レヒというものがありません。何だと思えますか？」

正月の雑煮なのです。白味噌で作った汁に丸い小餅が入ってる。あの関西ふうの雑煮は、いくら正月のengiのものでも、とても二杯は食えなかつた、というわけです。最初に関西雑煮に出会った場所は、飯場や、めし屋やいろいろでしたが、結論は同じなのです。

正月の雑煮といえは、子供の頃の味が一番舌にしみこんでいるものですから、この話はとてもよくわかります。それからいろいろと話がハズンで、日常の食べものについても、なにといつた文句が話構出てきました。しかしそれは暗しみます。私たち、つまり流れ者、むつかしくいうの

〈筆者紹介〉

今月は小説が休みなので、神画の紅キノ子さんに随筆を書いてもらいました。女性のこまやかな感覚が文章にめし、そのせゝも流れています。



私の田舎の家は間口二間、奥行一間半程の小さい店をやっている。半分がくじ引きのするめやあめなどの駄菓子がおいてあって、もう半分に鉄板台一つおいた小さなお好み焼屋。それまでやってきた揚げ物屋をやめておはあちゃんとお母ちゃんの二人でやり始め、なんと軌道にのりかけたころおはあちゃんが病気で寝こんでしまい、かわりに私が店に出て、お好み焼さ屋の小さなおはあちゃんになった。

小学校五年から家を出るまでの十五年足らずの間にお好み焼を焼く私が子供から大人になつ

が好きなら人には流動的の下層労働者は、あちこちを渡り歩いて、飯場、めし屋、時にはフタ箱もまじったりして、ずいぶんいろいろなものを食べますが、その味の好きさならいの本は、やっぱりおふくろの味らしいのですね。私はそれを考之させられ、いまも考之ています。

× × ×

ところで、その話相手だったなかまたちには、山谷のめし屋のこともたくさん聞きまし。木内さんのレポートに出てこない店の名もいっばい出ました。いすれ、それについてもままとめたものだと思つていきます。

そばは中村屋とか、カネのある時いろいろは通りのヒザワとか、三好清海入道といつた感じのオヤジがいる大林酒場とか、酒なら遠州屋、やきとりの長谷川とかでした。そんなときに、また木内さんも書いてくれるといいなと思つていきます。

ていつたのと同じく鉄板の向う側に座つていた子供は大人に、おはさんやお、さん達はそれ相應に耳をとつていつた。

夏が終つて肌寒い頃になると、あの鉄板のあつたかさど髪にしみこもきつい油のおいがなつかしくなる。

父親と二人暮らしだったトモ子ちゃんやら重度の身体障害で口もきけなかつたよだれのあんなちゃん達がはんがわりの一枚のお好み焼きで四時間も五時間も鉄板に手をあぶつて、なかなか帰ろうとしなかつた昔を思い出す。

実際、お好み焼にはキャベツ(野菜)、玉子(たんぱく質)、かつおぶし(カルシウム)、メリワン粉(炭水化物)、というふうにならばバランスよくはいつていて、結構めしがわりになる。うちでも二日に一度は夜のおはんがお好み焼きで、そのためかなんか子供の頃から新氣一つしない。

私の家のお好み焼きの作り方はメリワン粉や野菜を一つのカップの中でさちやまぜにし

で一緒くたに焼くのはちがって、始めにメリケン粉をまるくしいて、その上にかつおの粉・ギヤベツ、油がす、かまぼこ、玉子を入れる場合はその上に王子をわつて、最後にメリケン粉をかぶせてひっくり返すという、ちよラビメリケン粉のサンドイッチ方式。現在で玉子なしで七十円。王子入りで九十円。それでも結構、利はあるので他の店の肉が一切れほど入っていても一枚二百円とか二百五十円とかいうお好み焼きはずいぶんとうかつとるんだと思う。

なんでも子供の頃に聞いた話によると、お好み焼きの起りは大阪で、主人に死に別れたか捨てられたかしたおばさんが、子供をかかえて生きていこうとした時に思いついた屋台作りのお好み焼き屋だということ。その時はなんでも洋食焼きと叫んだそう。そのおばさんのおみ出したお好み焼きがなんと、私の家で焼いてゐるあのサンドイッチ方式だったと、いふと、ずいぶんうれしかったこと

に入れるのもこれまた大変。今のようになんて一本でシユツと火がつくなど者之てもみない時だった。

一日に何度となくギヤベツを切つて、体中油のにおいと、ギヤベツの生ぐさいにおいがしついてなかなかとれず、娘なりし私にとつてはなんともなげなかつたけれど、今はいつの日かどんなに小さくて汚なくてもいから安にお好み焼き屋をやりたいと思う。一つの火を囲んで焼く人間と焼きあがつたのを食べる人間がぐだぐだ話しができることなど、このせちがら世の中でもう再び望めないような気がするからかもしれないけれど。

XX

〈二七ヤージからフック〉
世って「愛憎」してやしない。

国勢調査ではああいうトヤその一族はなんて書くん巴る？

とがある。

その頃、近所のとりすましたおばさん達が「あの汚ない店で物を買った、食べたりしたら、いかによしと子供にいい聞かしてゐるのを聞いて、クソッ何をいいやがる、と思いつながらもなんとかあのコップの中で材料を一緒くたにした焼き方のできる鉄板台を何台もおいた店に受てはし、切に願つていた私に、うちの方が本物のお好み焼き屋だったといふ少なからずの自信をつけてくれたから。お好み焼き屋にしる何にしる、食べ物屋というのは準備が大変で、今でこそガスを使つて簡単には火が便之るが、私がお好み焼きを始め二、三年は大きな六角形の練炭火ばちを使つていて、私の仕事は朝早くに練炭に火をつけることから始まった。火はちの中で紙くずをもやし、その上からはちの単のように穴のあいた練炭を入れて、下からパタパタあおぐ。なかなかうまく火がつかず苦労する。火のついた火ばちを、鉄板台をななめに倒して中

「少しでも仕事をした人は」つて、ところと「少しも仕事をしなかつた人は」つての、とあるけれど。それから「居住室数」「畳敷」なんてのも、こちらにはほとんどワカラナイ。想像もできない。

（シリキレトンボでさめんなさい。長くとると編集長にしかられるので——下。）
XX

〈三三ヤージからフック〉
Aに入り、この建物にはDで立ち退いた人が入る。この順序が一番泣かされたのは一番最初に借金でAで立ち退かされた人だという。当り前のことだ。

そういう住民の犠牲のうえで、しかもおれ達とは関係のないやり方でこの街が変つていく。いや変えられていく。あと一〇年程したら、アンタこの街が住みやすい街になつていふと思う？（はあAとはセンターのこと、Bとは新今宮小中学校とスレハスのこと。）